源流

茶湯綱目 二

467

茶之湯綱目　巻之二

三畳大逆勝手真の手前弐具之茶

三畳大逆勝手真の手前左点茶

一畳半順勝手出炉昼の手前

一畳半順勝手出炉夜の手前

一畳半順勝手角炉昼の手前

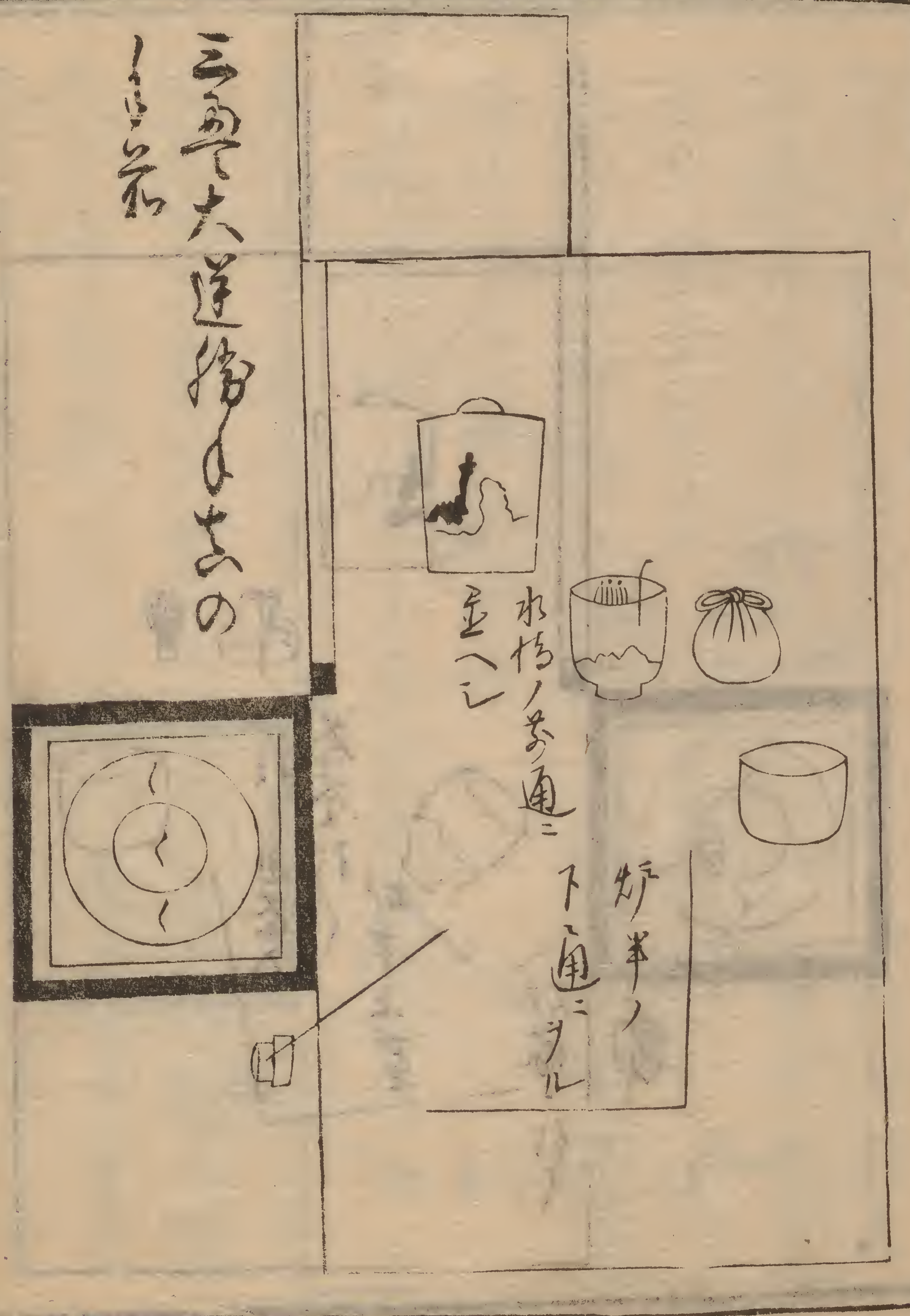
一畳半順勝手角炉夜の手前

一畳半逆勝手出炉昼の手前

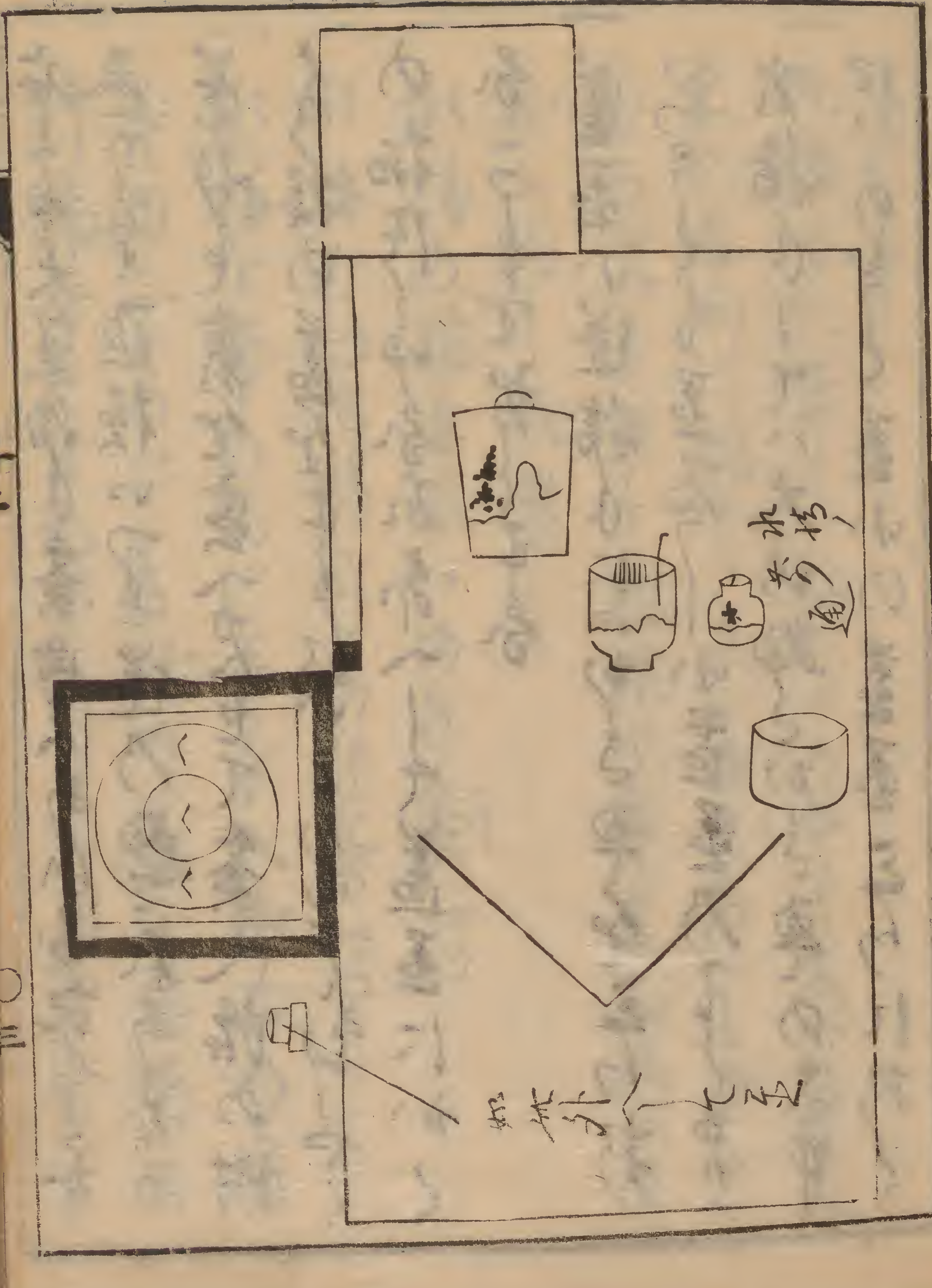
一畳半逆勝手出炉へしま手前

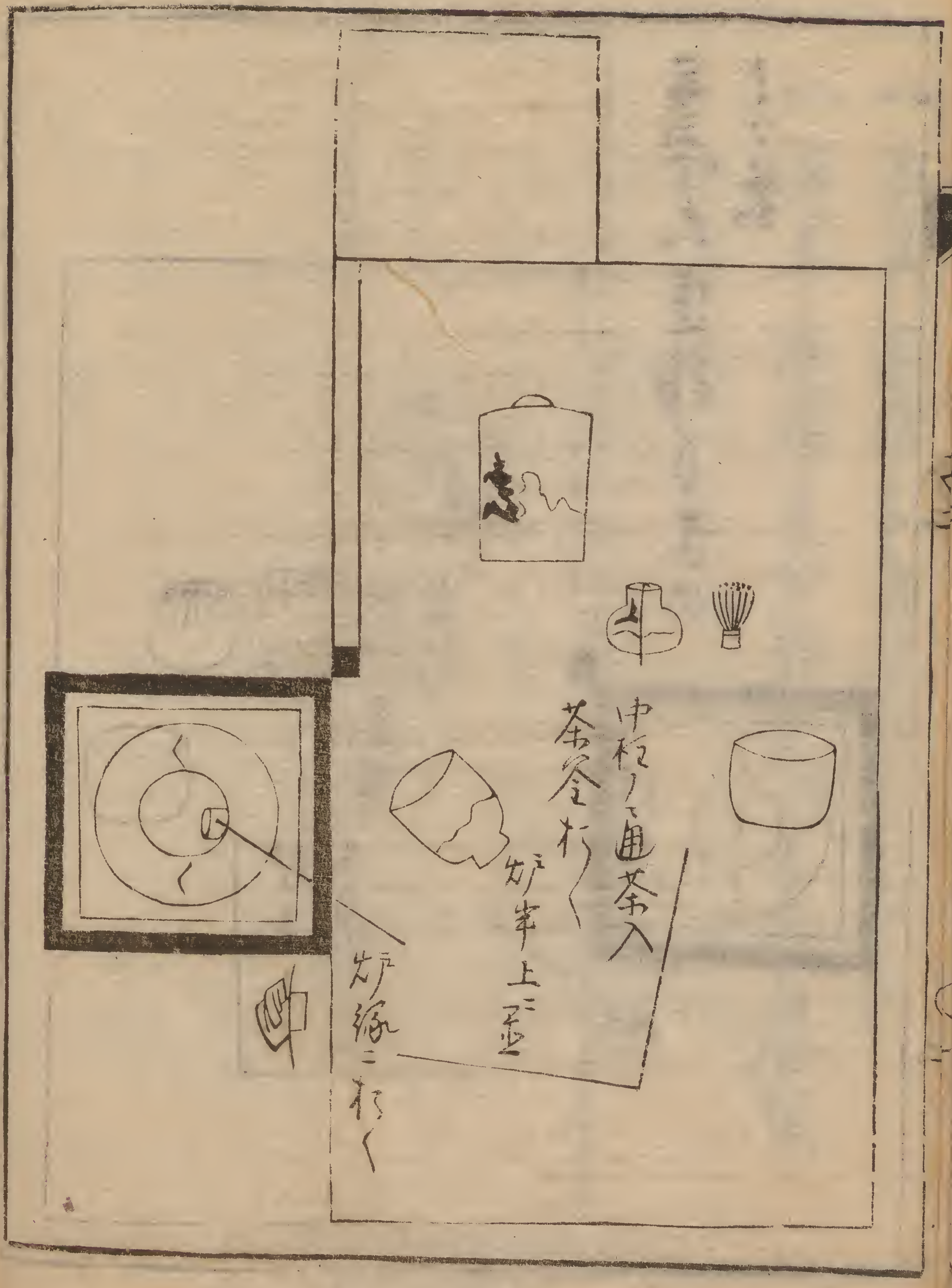
一畳半逆勝手角炉昼の手前

三畳大逆勝手出炉のかざり



一 四畳半逆勝手角炉にて手前
一 畳半逆勝手出炉其の手前茶釈




中柱ノ通茶入
茶筌おく
炉半上ニ置
炉縁ニおく

右三ツ共大違棚に文錺曲尺あり略記ミる所
悉なれ共點横いつれ違乃始にならへなり
茶杓と書を宮へ刃をて錺之治の時
その棚の蓋を止るにいまつれとしやく
の棚板ゆゑ有餘へ一して蓋墨にかく
所ニ寸を切し正所
一 蓋墨ハ違棚にハかさ墨を三ツおく
ところも墨為し 小蓋墨乃ことくおく
此棚にてハ大の幅とかさ墨の真中
口メのまへく墨小の蓋墨三ツにおく

墨なし
一 此棚ハに茶とハ板かざりなし 其ハ品之
木の寸の故なるし 曲尺(カネ)おこるとく
所乃不ふ記を點(ステ)様(ヤウ)で墨て其乃と
前ふ同し故略すと
一 北棚の勝ふ弐メのけ錺(カサリ)一ツ
一 北棚の向内勝弐メのけ錺一ツ
一 北棚を常の所に墨茶入棚ふ乃方
畫て用ニメのけ五棚(サレ)乃通小墨茶ふ
竹柄をきす弐分のをおかれ下ひの法

を茶にして置べし

一手拭帯下に置向(ムカウ)乃風炉先窓に
蓋并柄杓乃方七寸のけ柄杓の
かうをうつむきにかけ柄杓柄先ちか
置一寸又分袋入の茶入をかざること
一ツ

一下棚乃真中に袋入の茶入おくこと
一ツ

一下棚に柄杓かうをうつむき筋かへて柄先
出し置也一ツ

一上棚に香炉(カウロ)火を入銀だんに伽羅(キヤラ)置
下に手拭帯乃ごとくにかざる

一下棚に柄杓うつむきを茶碗茶入二ツを
ならべ置ましも置

一柄杓を風炉先まはしにうつむきを柄の下に
竹輪一寸又はのけおく也一ツ

一そゝくを中ぼしの前へ竹輪を中
柱乃輪ハ置べし

一茶入柄杓かうをうつむけ手拭にかけ
置蓋置也一ツ

床のかざりハあしらひを入候て
つきはけよしとこしらへてよし
数寄の床建を入此乃間にかけを
切ておくさだまりあれ共かし
会(クハイ)席(セキ)にけをうけ物をよく候のそ
けうさめいへかのひまれ候を
冬はなれば荷もかゝして置や事共
出しくおはしを絹こそときく
次乃まゝめ水つぎ上座へつもてよし
茶碗 茶巾をはしいくそうれ

此乃間にかゝるをきつひおく事
花かごをあもとてよれ事かし
客あれば茶をかけ物をよれそのそ
炭乃間はそれに人物しげく
風炉先のすゞれどもつゞきだんを
うるてらひ法を物つかうべし
みじかきあつ色すゞれどきかせハセかすそ
露がゝりて言葉めいつく
宗匠めに板戸のなれぬ物しれぬや
月のありう乃尺さくまうれど

しやうぶの水付の葭一重を添
一ところにてふたつあまりたり
入りやうのそうまでし枚は後法なり
これ定まりたるものとしるべし
入りやの中は枝をさしかへ又は
がくあつらふかはるもかくのみ候
かやふさのみねまへよりかけそひ
半ばつもりてはるしくおくべし
こねのおかさ入竹三本で活し
りしびなるほかくるまでけすれ

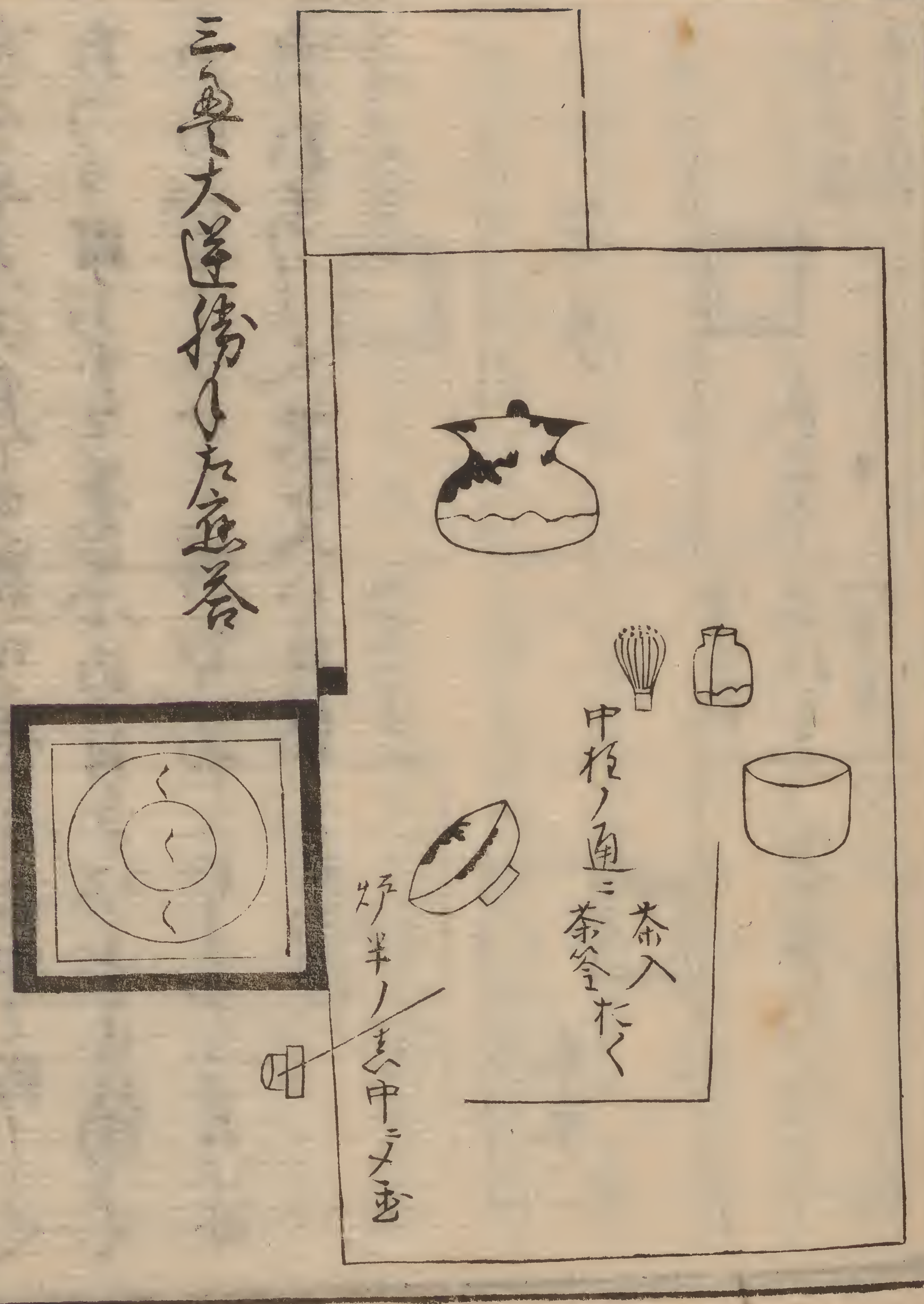
今の世は香渡に入まる物を
小さくはは角に置くべし
も水引しかけの数につけく
両つの時は男の色かつ継を
菱松葉かけ葉の色まで式法を
松の下の如く活けもののおき
薬湯庭いろくおひきもれと
作れなりはのそくなふなり
背一ツの竹とうへ入かうりおきものを
女竹志の竹熊笹もよし

芝を始め小松をうへてきつくよ
おもし絹く入て京もよる
ふたんを八すのまく松葉しく
これをあつくしてまろめそかし
手水鉢脇に湯桶のすへいしよ
冬はかならずしも入ぬそかし
刀かけつくへかうすしがひさしつけ
はしらこるかをこしらへそかし
ちさき穴のやうに松葉にいれてよし
ようにかきまる葉にまいれてやり

ふとう絹こしやかしてにおく縫て
手水鉢のあたり一入の京
とうしんを
みつちやに
きつき
かけて
月夜に
風しのちかひ
なるまもり

月乃夜は
七節いまく
なつかしく
月はあかりで
みはくきもの

三畳大逆勝手左座茶



右三畳大の点合釈四畳半の心と同し之
たつる所ハ葉谷のれさうまゝ依く
たあひしひと緒訓やくにしやくたゝみ
吹れましく之思文ハ口傳にあり

れを畳半といふ中古乃開山千利休
宗易居士乃座敷にかく侘人の茶の湯
みうのれをうけて座敷の内の板を
取りて程よし主板を弐ツに切て風炉
の大板とし大板風炉を切に是つめ
四尺七寸三分の所より是尺四寸四方
の炉ちうて長す八分乃板をを入居
縁ハ中畳に是畳の畳とかへ一畳半の
座敷ともいふ座敷乃是前の板をのぞ
し弐尺弐寸に引竹を入弐畳の棚

を侘茶の湯もまた初めの板か一畳半
乃足前に炉先の板より付炉ともいふ又炉
先の板切れて台子の風炉の前所に
先炉なり

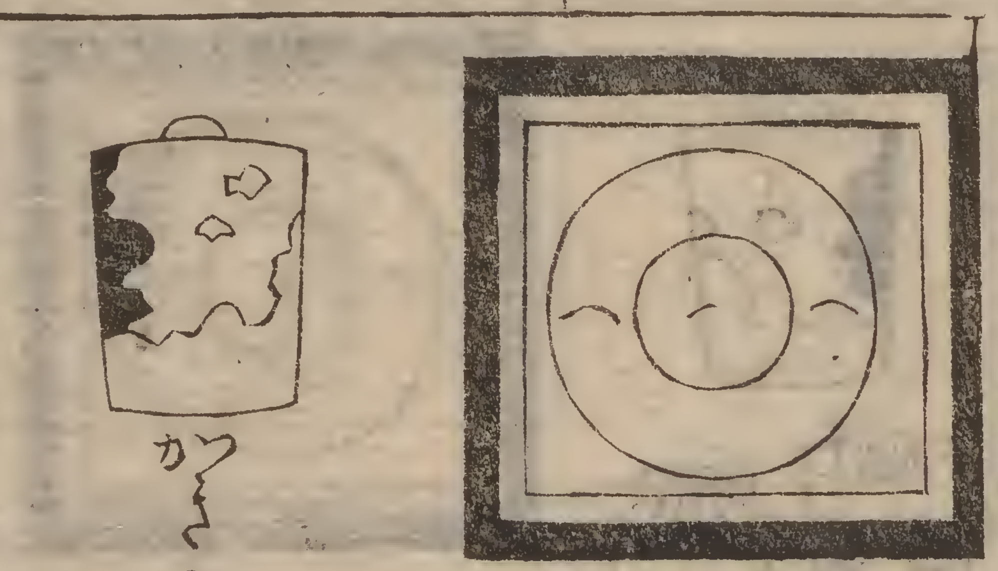
一 弐畳乃棚ハ台子大きさ弐尺八寸乃
引竹より弐尺七寸ケ弐尺四寸あるを
以て引竹のあるさに定

一 中柱を曲柱といふ弐尺弐寸四方
まつる台子乃寸法をもって乃中に入
後ハかく八畳ゆかりしとハ棚のかうらひと

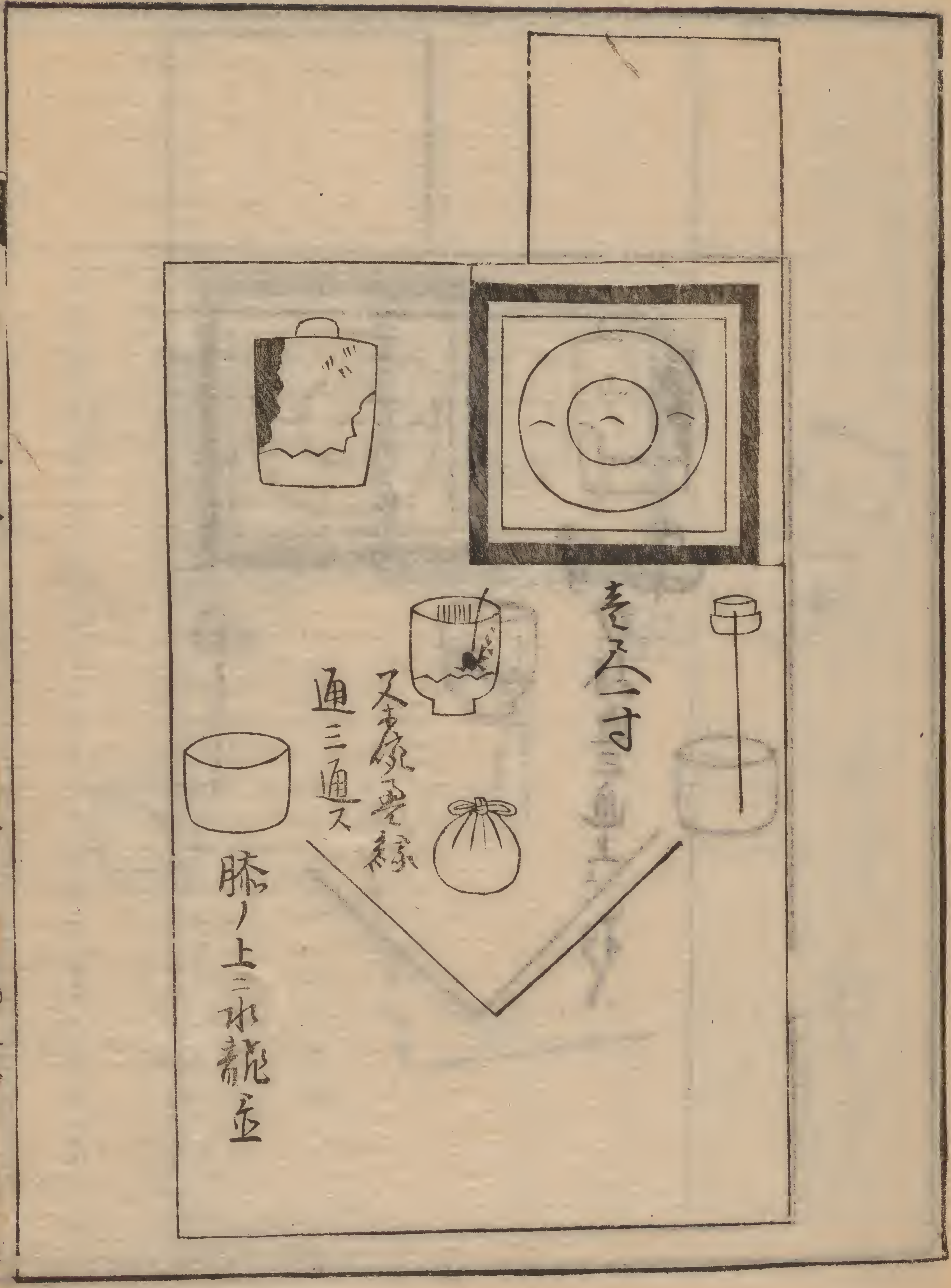
乃心ゟかへを付る
一 此炉を世にハ流に切ると思て云又向點(ムカフダテ)
とハふるき白人(シロフト)の云なる事が風
ゐて八太の心也人ふきうと思て切と云
一 點ゟ金不すぶ流にて記と云世ふる
此儀ハたみるく此のれあつかふて
不あや習し口傳にあり

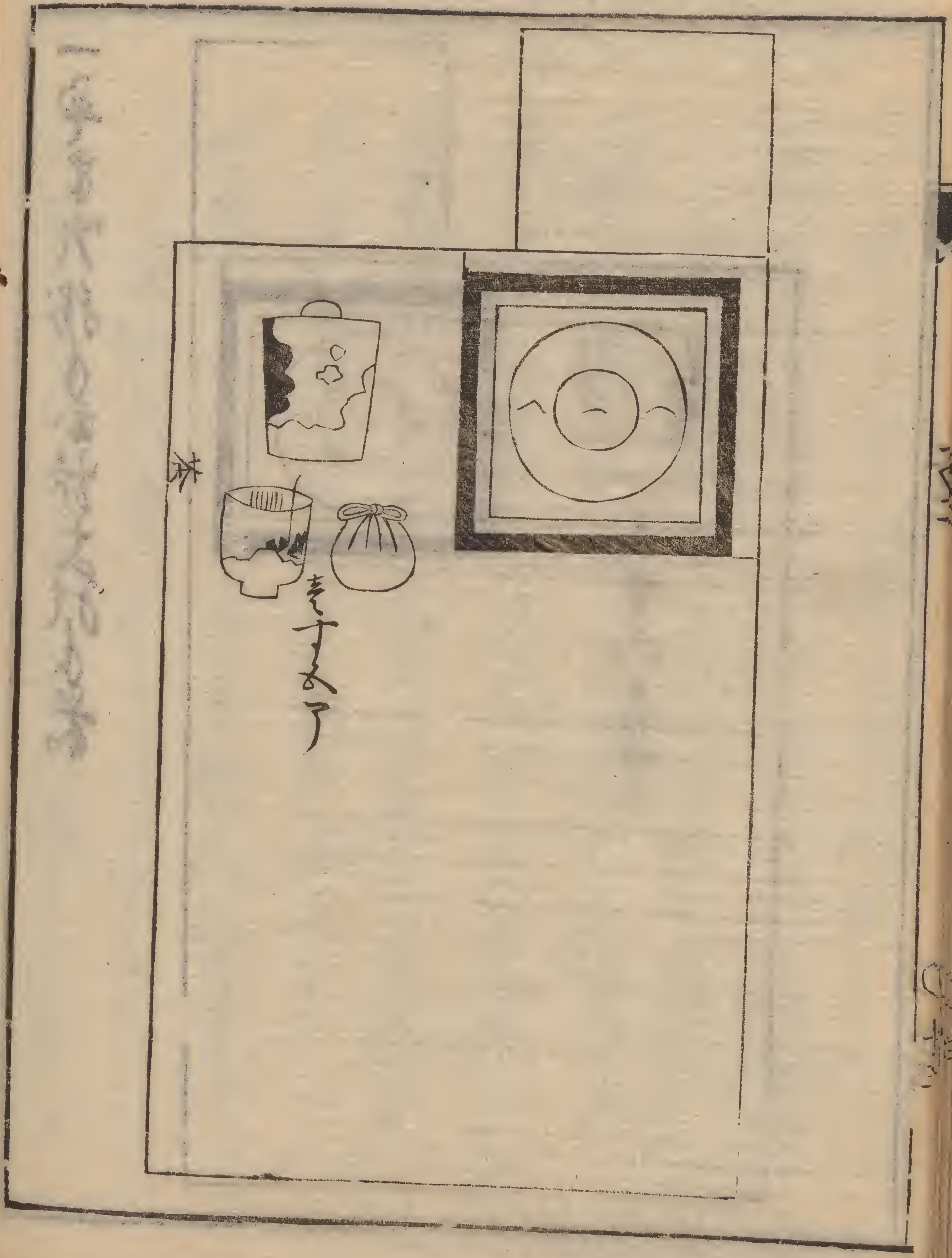
一 四畳半ハ炉あれハ炭乃盛よりにあ
角炉の山炭ふしふくかりそ
一 四畳半炭乃時ふもし炉乃方ァ
そのまゝ炭のよりとて知るへし
茎山炭を出しと何ゟおもひとさ
より炭ねすしはあいしいかせよ
細(ホリ)炭(ズミ)をもとまゝに入てよりのそ
炭乃けいれて云よしとの家
一 此所にあかりにたてとの事あかくとのを
乃ちらふうちにつへ入申し

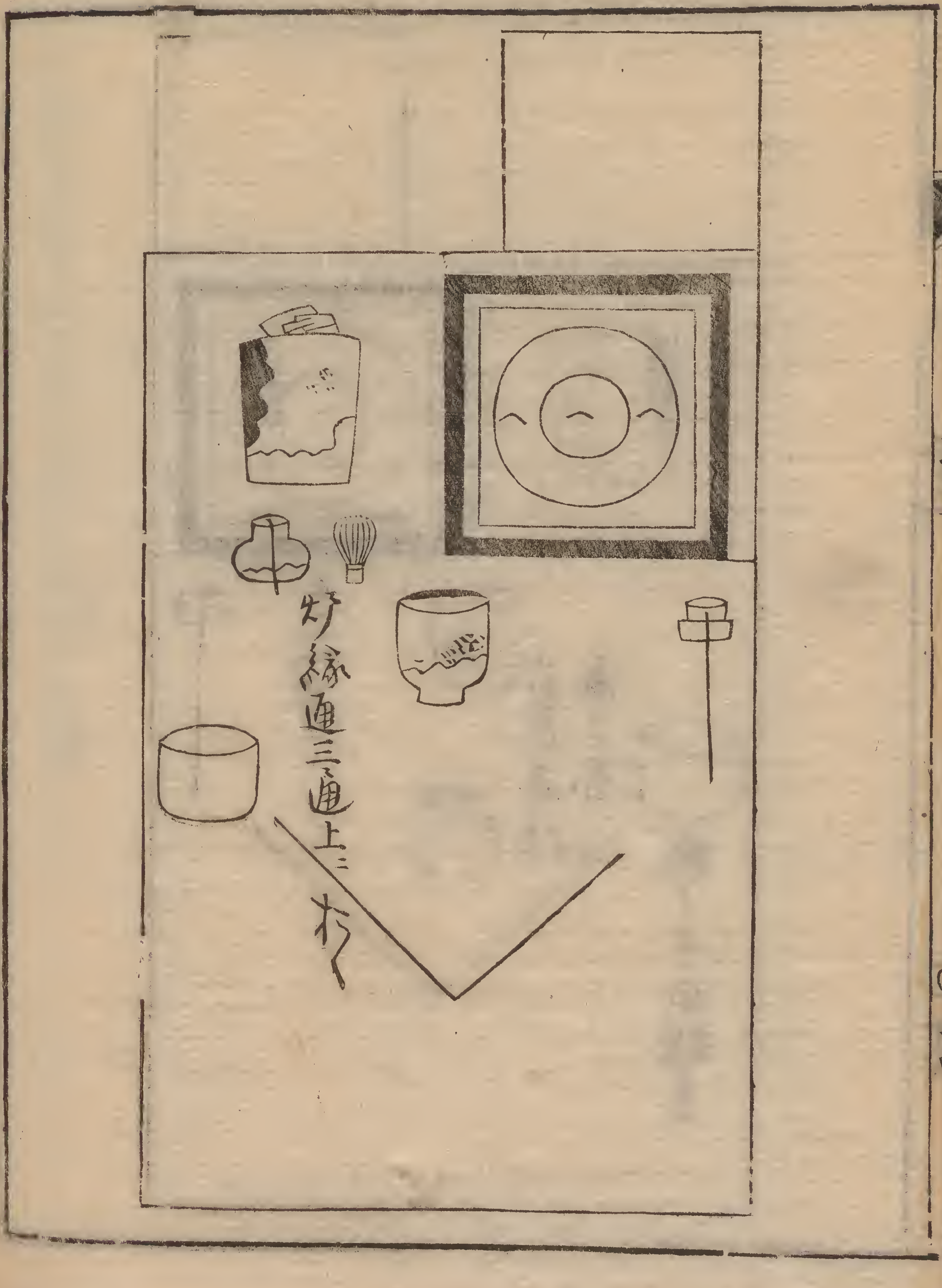
一盆点水指に茶碗をれに飾

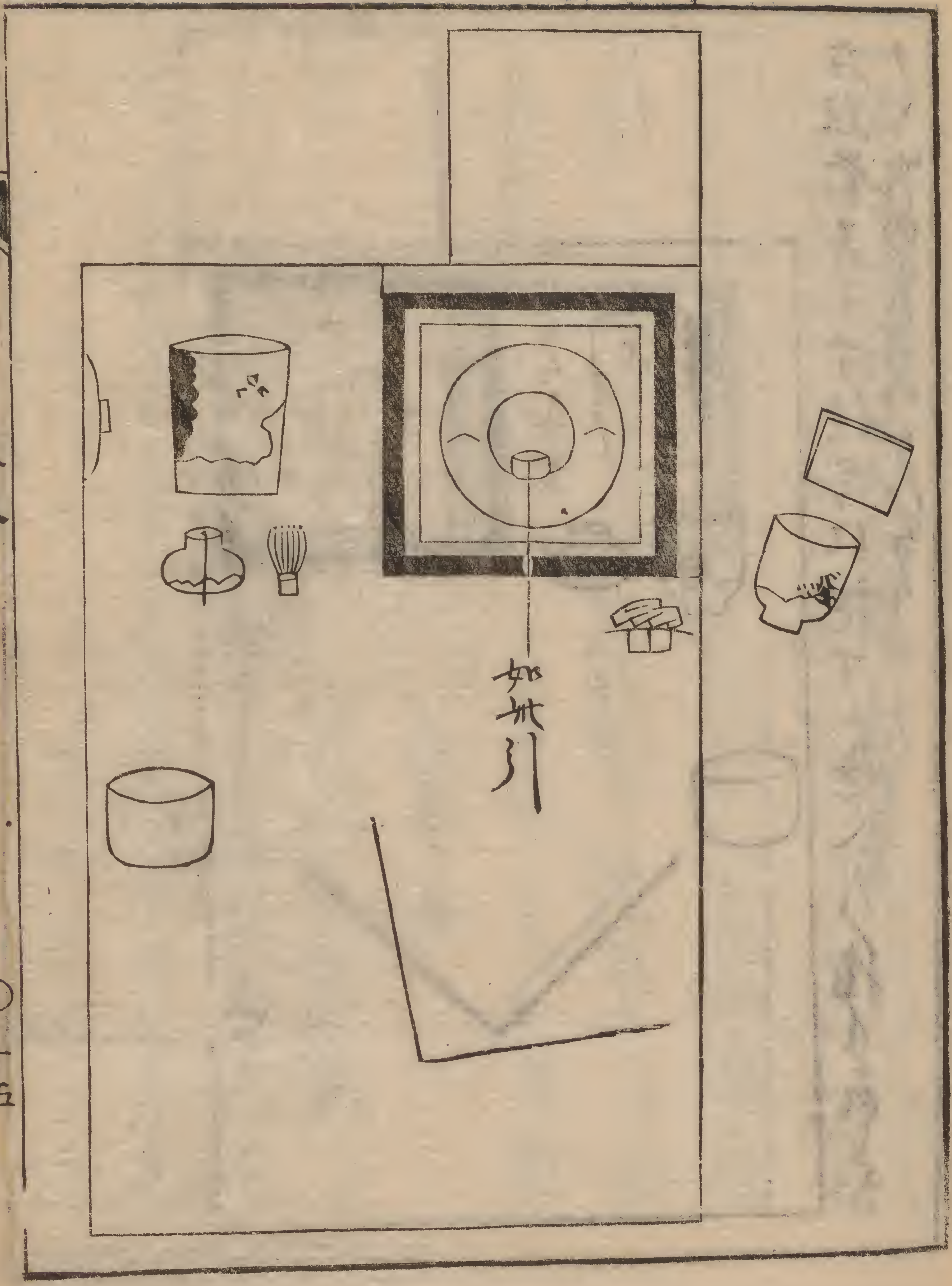


かさ盆の志中

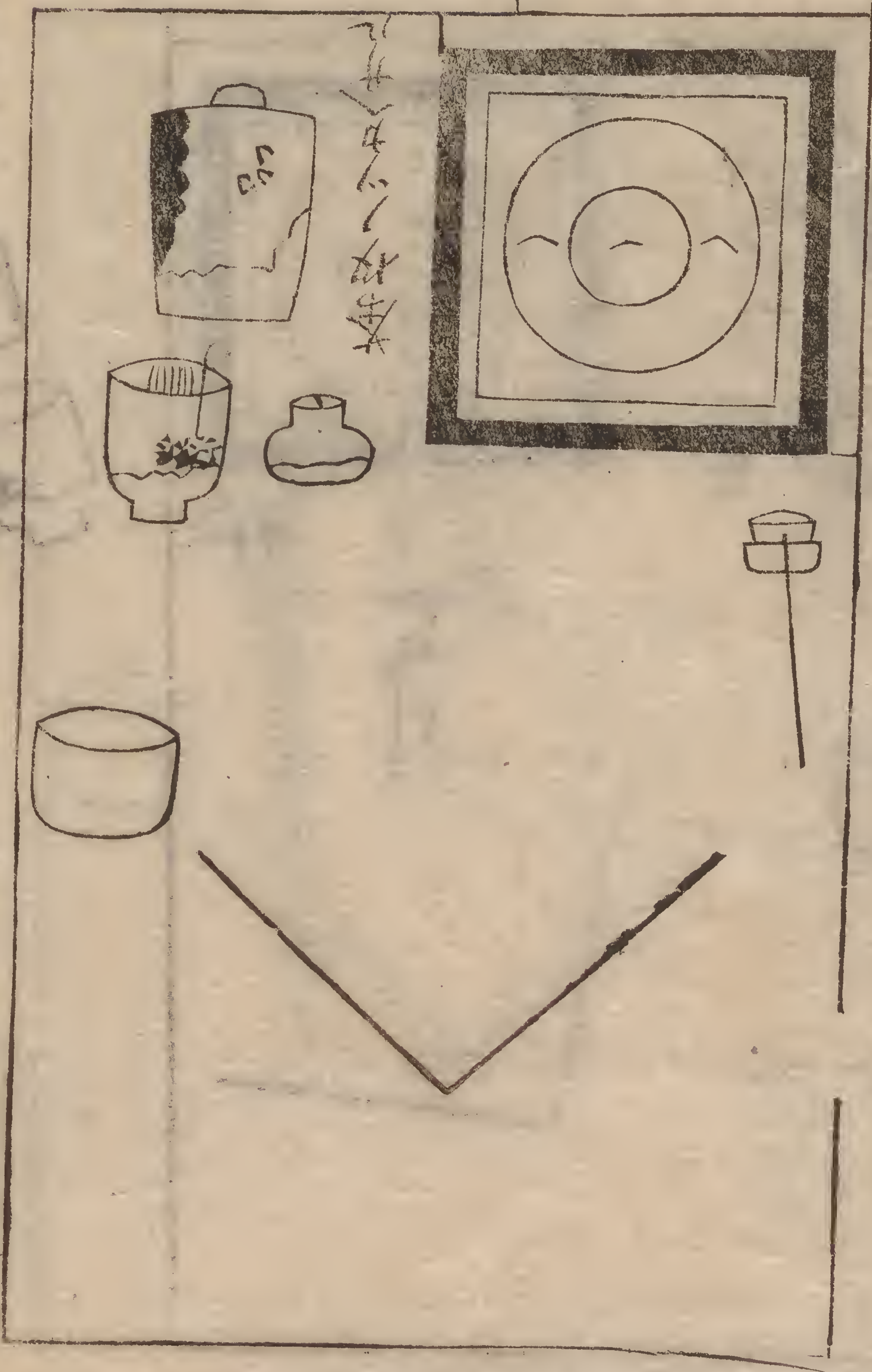

壱尺二寸
又東風要緑
通三通ス
膝ノ上ニ水龍立


茶
壱寸五ア

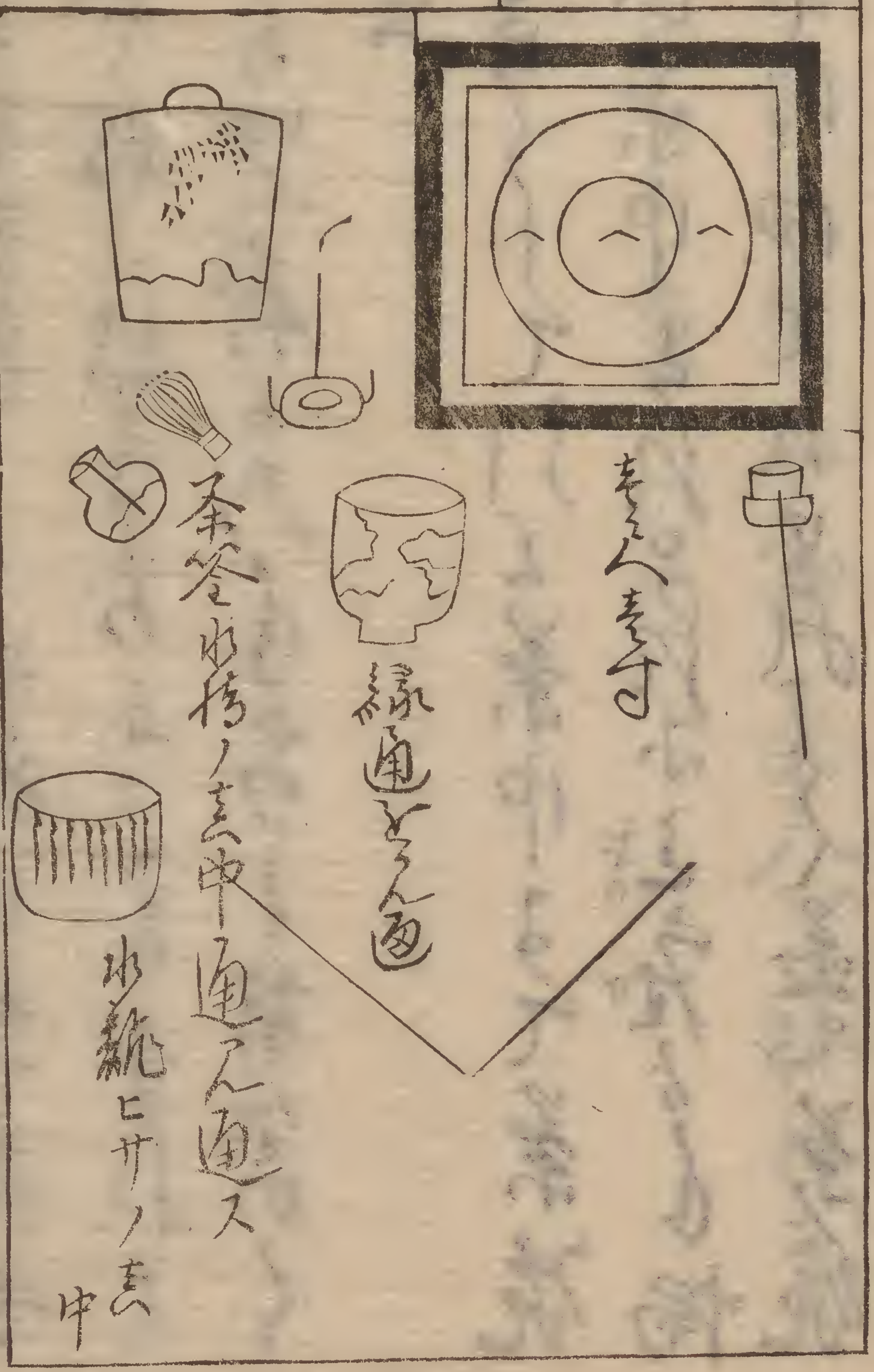

炉縁通三通上ニ打く


如此ノ

右點前盃不寸法易に記する也 水指は瓦こふ
く次のゑあつりひ有り



一通まく順指は於炉蔭袋にて點



右お坊乃床乃ほかと細々順様よ乃
草(サウ)よりおなじ紙とともに様よりゑて床合
ゑて是(ゼ)非(ヒ)よ此よりおゑくなされた
おうさらゆへ秘乃よりおゑし茶をかく
して云
一茶碗こうじて引よ茶巾まて茶碗
ぬぐひ茶巾之れをこれよ上座(ジヤウザ)分よ偏
おさつし附向を引罷けよく置し茶碗
の内を見ろ廻さうる飲なり茶を点お
し又よ偏と出そ廻しそのかう点れ

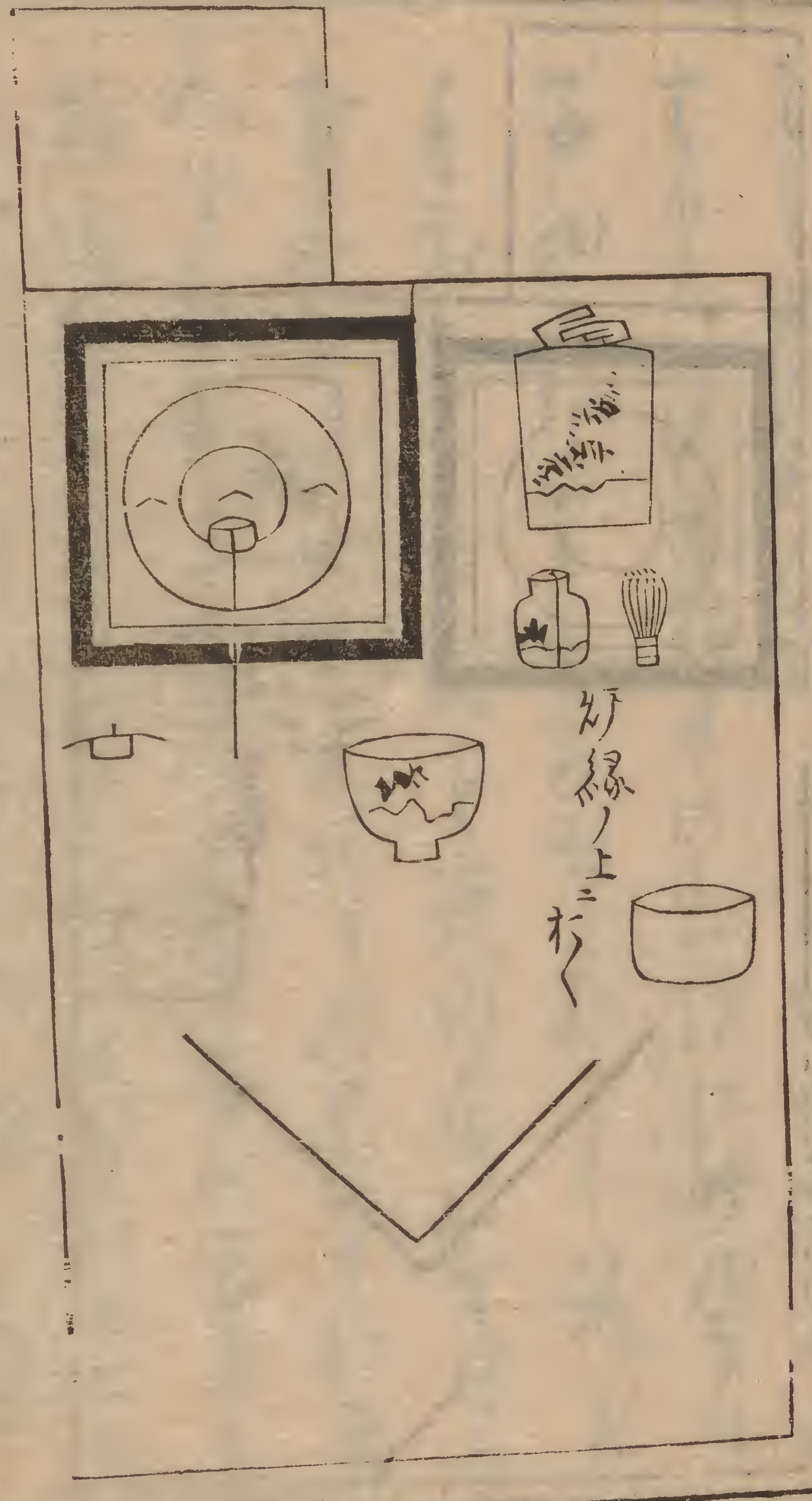
ふうつくゆすし
一茶といふ茶碗袋(ロウ)にゑ茶ゑのまゑ茶巾
をの稽古に茶碗壺茶入と袋にいおく
廻し先を草の内之

一 亜中以縁ニ角炉席之飾ニ前

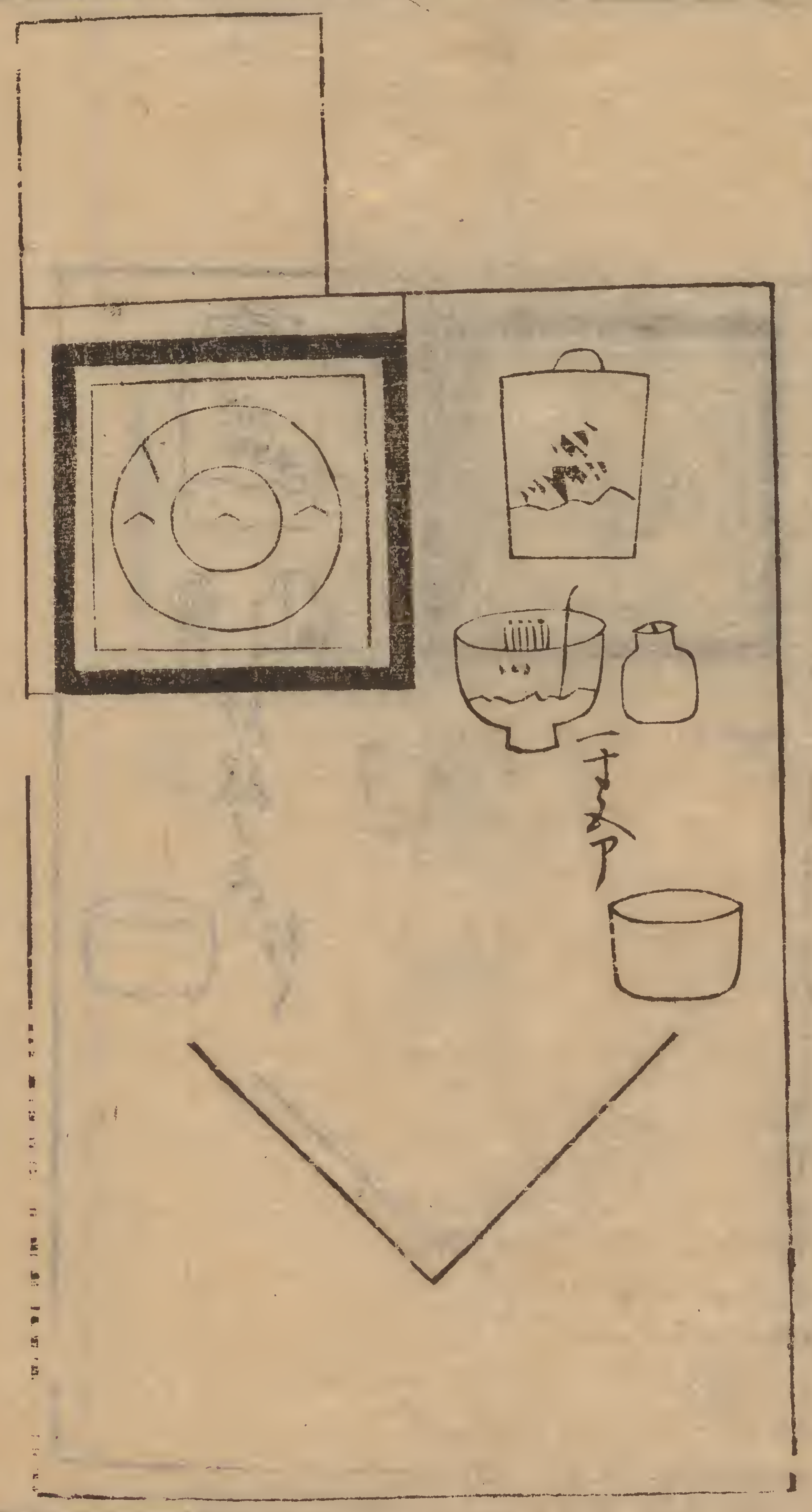
右炉縁の角炉壇乃上より中ほと細く
置にて向ふへ出し置く棗ならては茶入にても
用る事也 或は炉縁の上くその絵をものゆ
へ或は棗のたゝ盆のことく縁に盆にのせ茶
のるしひあつる又茶碗遠る事也る附のよ
将しおゑ立さかよ

一 盆点運様は出炉点様の事

膝ノ上通ニほし
おく


炉縁ノ上ニ
おく

此逆勝手は台子飾しのは前に客より向かひ合
ことし曲尺あひ所に書付のごとく一畳て
すゑくは此逆勝手の出飾は能々なり
手初はにしつてはおるとおもし候哉
はおなし也母も夜のは前もなら
事也それ也に所乃志中に茶
入と壺中にはなくとも壺に客まて
御遠とくゆゑもあるてい志色のきこへん
ある也なる菓子壺所飾と志中
あしくおもふへし　さしやくそうしようかり



すらり云合やう湯多し

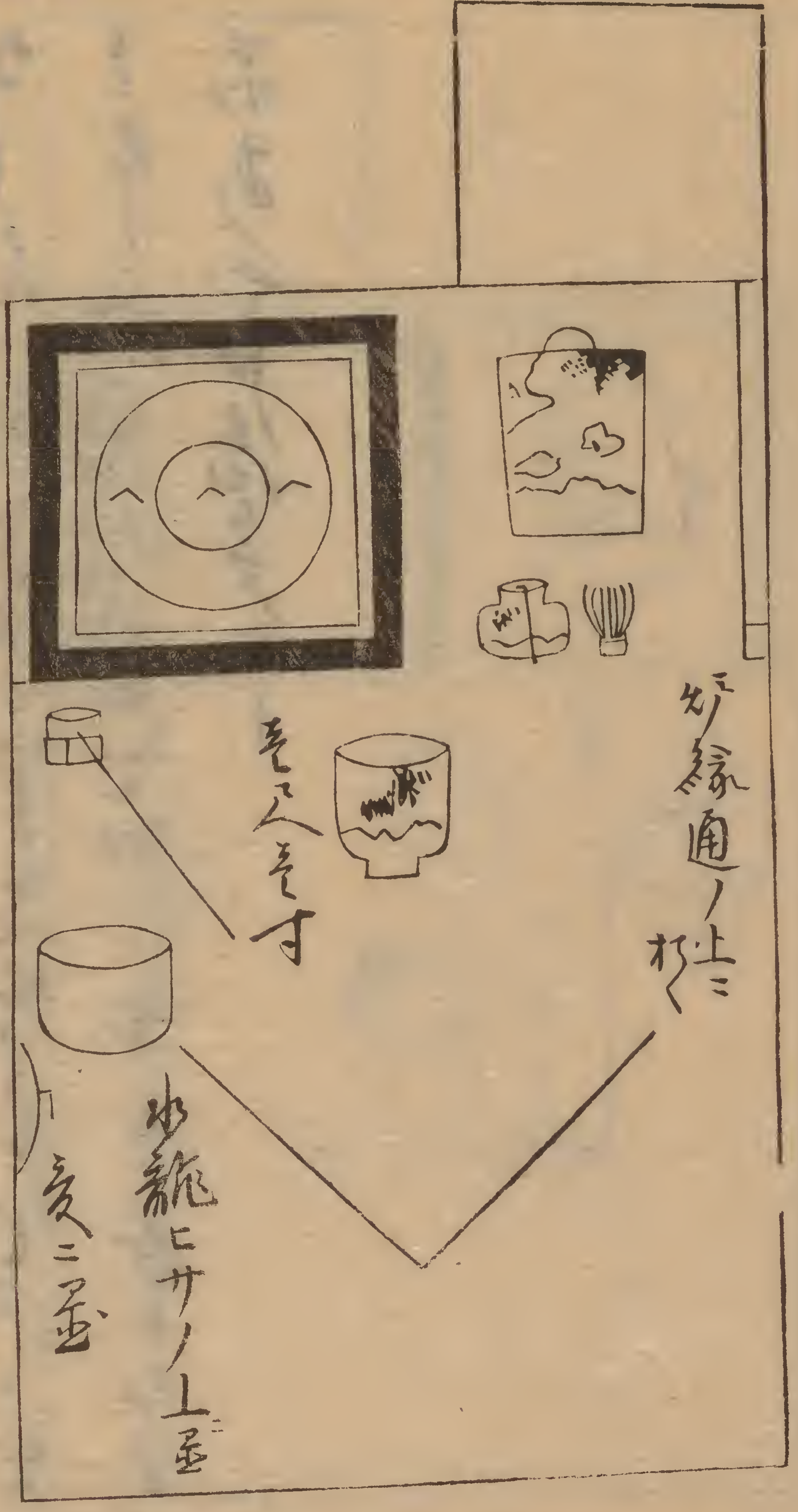
一 四畳半逆勝手角炉古代の置合

右逆勝手角炉台子の手前図ニ記さゞれ

共しるやく置あはせの手まへておくならハ

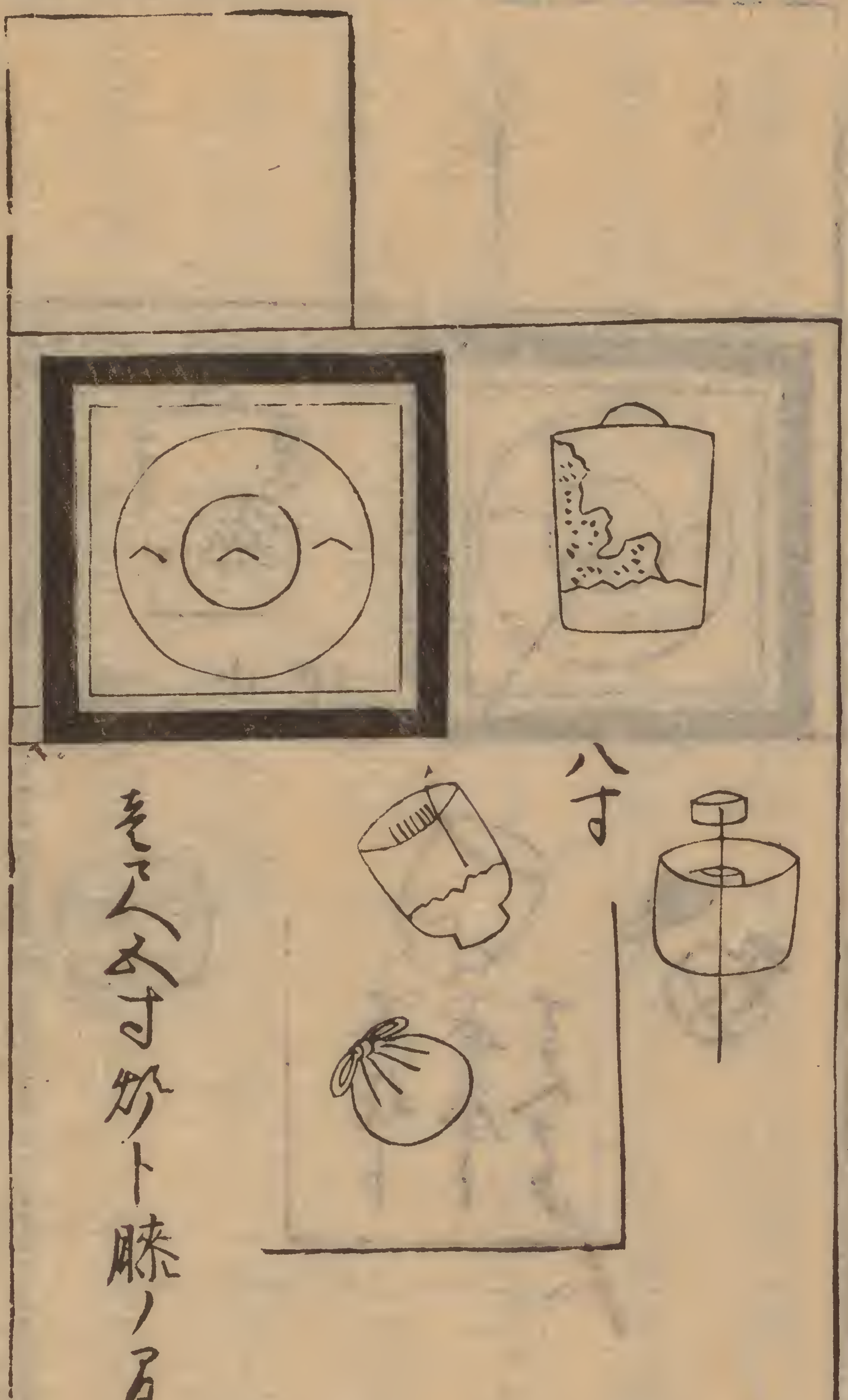
手前常(ツネ)にかはる事なし

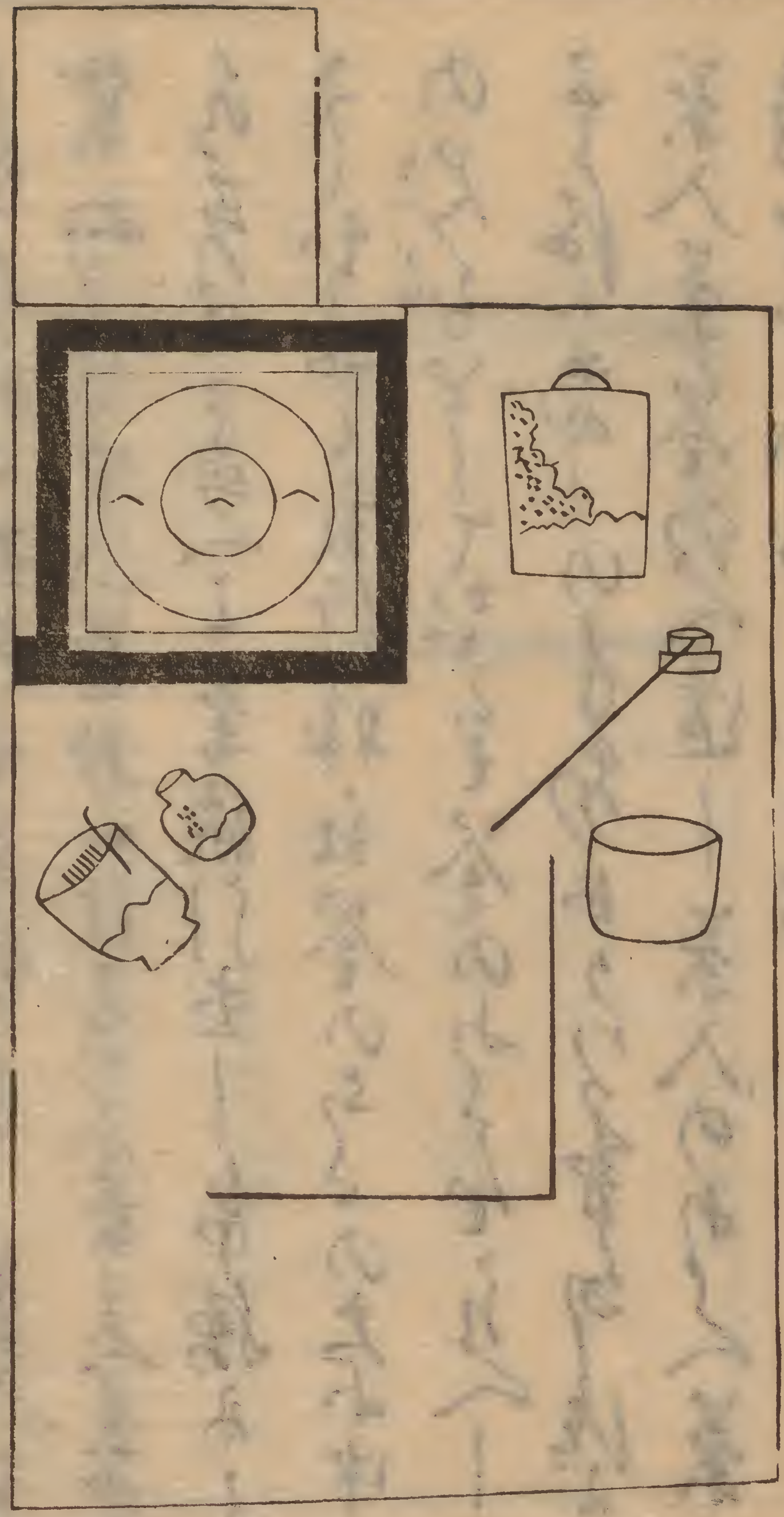
一逆本勝手角炉台子の手前

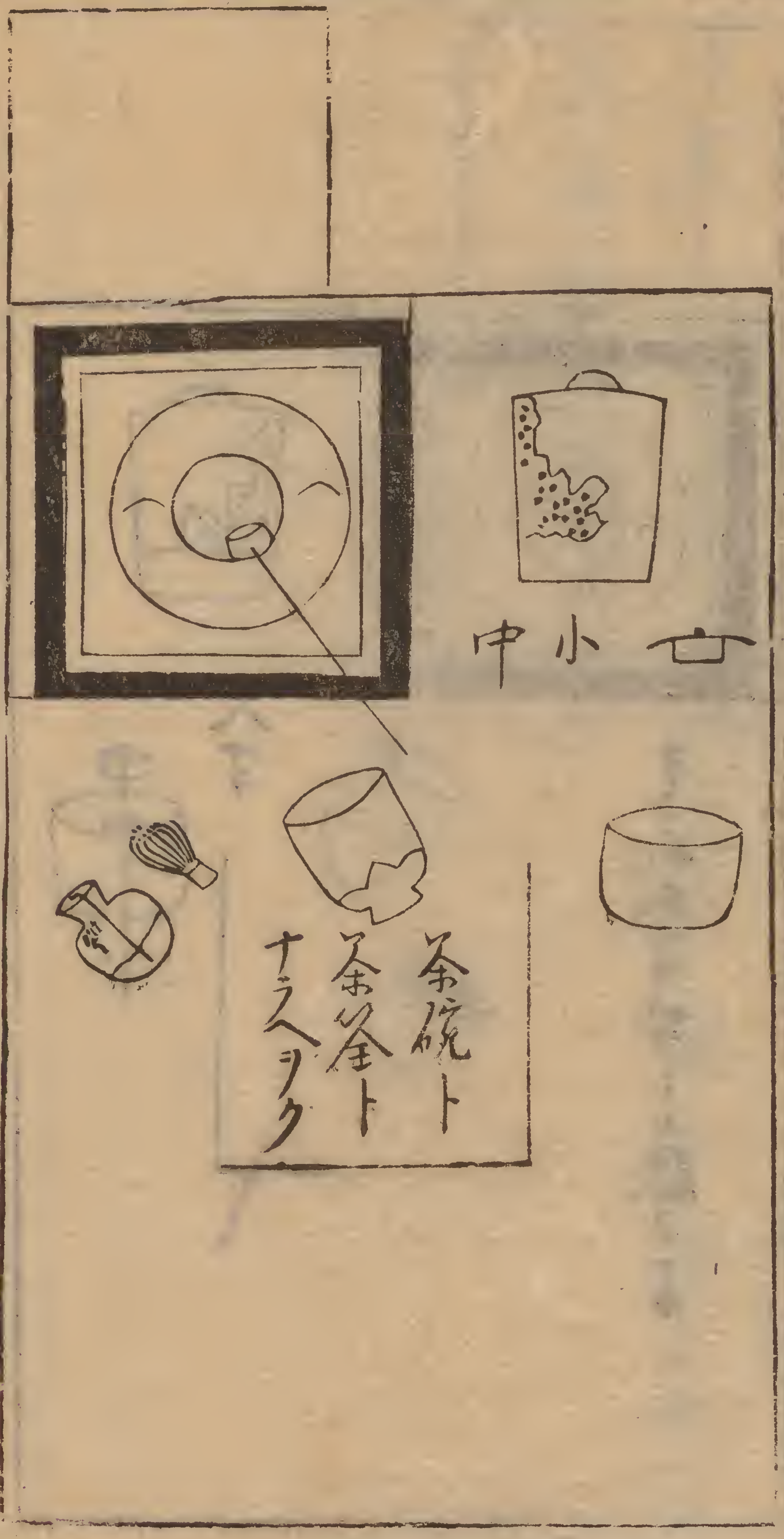


右水指の角切ハ見合ぬかる事
なし又翻を添ゑて左へ寄る也以て置
く事ハ水指の蓋を取て置かぬ為
成あや口傳多し

一 無水逆勝手の作り見るをお

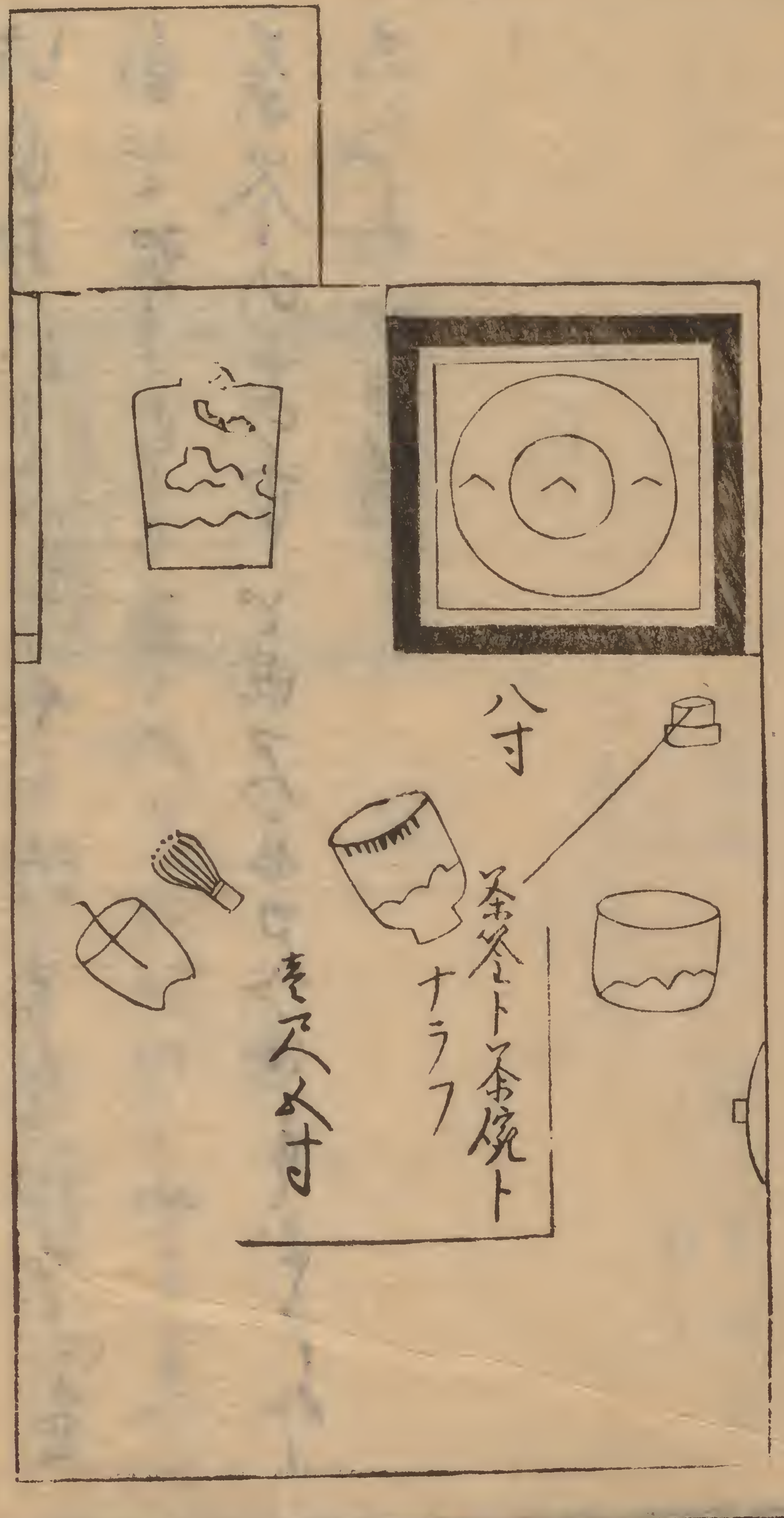





古小中
茶碗ト
茶釜ト
ナスヘヲク

大違棚にも飾る品の如し 居ゑ
して水翻の持出し茶碗におし 茶入を
袋ぬがせ茶巾ひ茶杓かけ茶釜なくべ茶巾
をおきの茶碗へ上茶碗を直し帛紗にて
ふきとりやくれ竹柄杓にて釜のふたの大小中
の火加減よくしてかざるに釜のかたをへし
手ぬきあらしのまあみのつり事にし帰は
茶入茶釜にへ遣し茶入のあとへ茶
碗をやるにあやし侍るにあり

一 違棚にも飾る角飾りして尺に花



右逆勝手ハ角炉にしても右勝手のことし
けれともおにくハ引しやく竹置所初めハ右
前を置しところ帯のうしろハ引しやく先を
茶碗の志帯と曲尺の尺通まて水
志るあや口傳

一 角さし逆勝手ハ右炉志のよ茶たて之釈

太き画てまての逆捲にて右舎釈お角跡共よ
同し作紀あり四画て半三画て大大よ同し
事示あやに傳ふ

揺三手前　塩八つ此習

四画て半順捲にて　古のにお
四画て半順捲にて塩　草のにお
四画て半逆捲にて　古のにお
四画て半逆捲にて塩　茶のにお
四画て半逆捲にて　右舎釈
三画て大順捲にて塩　古のにお
三画て大逆捲にて　古のにお
二画て大逆捲にて塩　右疏答
一画て半吹捲にて角お塩古のにお

一風炉半水指にて角ニ炉夜のかね
一風炉半逆勝にて角ニ炉之のかね
一風炉半逆勝にて角ニ炉にりてかね
一風炉半逆勝にて角ニ炉土のかね右會釈

已上八炉十三かね前

凡此十三のかねハ諸乃かねの又ニ父母と
なる故ニ濃茶も十三薄茶ハ指盆點
も十三其天目も十三其外ハ炉臺子
袋棚 棲楼棚 小休屋 自在 鎖ホニも
十三のかねの外ニ達すも又風炉末水指にて

逆勝にての炉小風炉 袋 茶碗ニ棚物ニかざる
十三のかね規矩の曲尺ハ顧ゟ家の大概
事ニ子細有三百八指かねハ根本十三
のかねより起りて一風炉半炉のかねニ
して のかねハ水指逆の三家かねハ大師此
事十三のかねの相かすとあきらかし 所
流志を極む素人の門弟入事と仕るへ
かけたるへし

茶湯　二之巻終